

エマソンのユニテリアニズム批判について

尾形敏彦

一

エマソン (Ralph Waldo Emerson) がボストンにあるユニテリアン派の第二教会 (The Second Church) の牧師職を辞任したという事実に関連して、当時の人々が想像したほど、彼はユニテリアニズム (Unitarianism) に反対であったかどうかという問題を取り扱うのが本稿の主旨である。この問題については、エマソンはユニテリアニズムに対して強く反対したのだとも、それほど強くは反対しなかったのだとも答えられるであろう。そのうえ、この問題は一見すると、エマソン研究においてはたいして重要な問題ではないように思われるかも知れない。しかし、これはエマソン研究の核心とも言うべきものであって、その解決をまたなければエマソンという人物の正しい評価は不可能であるように思われる。

当時のニュー・イングランドの宗教界では主としてニュートン (Isaac Newton) の思想の影響であるが、理論が次第に広まり、宗派的にはユニテリアニズムが勢力を得てきていたと言えることができるであろう。アメリカのユニテリアニズムは一七九六年に英国からフィラデルフィアに移住したプリーストリー (Joseph Priestley) の影響のもとにユニテリアンの教会が生れ、やがて、ボストンを中心にして広まったものである。これはカルヴィ

ニズムを否定したアルミニウス神学がその中心思想になっていたものであると考えられる。この時代の宗教界の動向を要約すれば、「ユニテリアン達は超自然力信仰を全面的に拒否するということはなかったが、信仰そのものもつ力を弱めていた」ということは思い起されなければならない。この世紀の中葉のユニテリアンで、もっとも徹底した合理主義者であるパーカー (Theodore Parker) の説教壇では超自然力信仰はほとんど一顧もされなくなっていたという状態であった。神学的に見ると、はるかに保守的な教派の教会においてさえも、合理主義の普及と科学の進歩とが、徐々にではあるが、自然現象と思われるものを無視することができ、事実、それを無視していた絶対的、独断的な『神』という観念を修正しはじめた^①時代であった。

勿論、エマソンが直接的に反対したものはニュー・イングランドのピューリタニズムではなくて、W・E・チャニング (William Ellery Channing) の指導のもとに当時のニュー・イングランドに広まっていて、教派としてはピューリタニズムに対立していたユニテリアニズムであった。これはニコロフ (Philip L. Nicoloff) の言葉をかりれば、「エマソンの宗教的闘争はニュー・イングランド・ピューリタニズムの陳腐な教義や形式に対してというよりも、むしろ、ユニテリアニズムそのものもつ青白い消極的、否定的な態度に対してであったということに注目しなければならない^②」ということになるであろう。また、エマソンのユニテリアニズム批判はピューリタンの立場からではなくて、エマソン自身の立場からなされたものであったことはことわるまでもない。リーヴァー (J. Russell Reaver) が言うように、「エマソンがアメリカ文化において、今日、しばしば、『ルネッサンス』期とよばれている一時期の指導者になったのは、ピューリタニズムにみられる最高絶対の『神』のもとにおける本来性悪である人間の墮落と科学的なユニテリアニズムにみられる合理主義のもとでの人間精神の束縛という二つの恐るべきことからアメリカ初期の知的生活を救うという一種の人間解放運動に彼が貢献するところ大で

あったといふことをすすべてのアメリカン・ライフの研究者は知っている」^⑧はずである。

本稿においては、第一に、ユニテリアニズムに対するエマソン自身の反対意見を検討し、第二に、彼と同時代の人々のそれに対する反応について、第三に、この同時代の人々の反応に対するエマソン自身の反応について述べようと思ふ。

(註)

- ① Curti, Merle: *The Growth of American Thought*, Harper & Brothers Pub., 1943, pp. 531-532.
 ② Nicoloff, Philip L.: *Emerson on Race and History*, Columbia University Press, 1961, p. 208.
 ③ Reaver, J. Russell: *Emerson as Mythmaker*, University of Florida Press, Gainesville, 1964, p. 77

ユニテリアニズムに対するエマソンの反対意見がもっとも明らかな形であらわされているものは、勿論、「神学部講演」*Divinity School Address* である。その前年に発表された講演「アメリカの学者」*The American Scholar* について保守主義の人々に打撃を与えたのがこの『神学部講演』である。一八三八年七月十五日にハーヴァード大学の神学部において発表されたこの宗教上の個人主義宣言は決して劇的な靈感をうけて突如として表明されたエマソンの確信ではなかった。たとえば、フロースインガム (Octavius Brooks Frothingham) がパーカーにむかって浴せかけた「パーカーは自分の思想と公開講演との間に少しの距離もおいていなさう」という非難はエマソンにはあてはまらない。事実、エマソンはラスク (Ralph L. Rusk) が指摘しているように、「神学部での講演を依頼される数年も前から、無意識のうちに、『神学部講演』を書きはじめていた」^⑨ のであった。

しらべてみるとユニテリアニズムに対するエマソンの反対は既にハーヴァード大学の神学部に彼が入学する以前にさかのぼることができ、その萌芽はこの講演より十七年も前の日記の文章のなかに発見される。それは、「いま、プライスの『道徳論』を読んでゐる。注意深く批判的に読みたい。この論説の内容と論法とについて、思うままの批評をここに書きつけよう。五十六頁のところ、プライスは、正邪は推理や演繹によつてはきめられないで、人間の心の根本的理解によつてきめられると書いている。このことが十分に立証されるとよいと思うが、なにしろ、懷疑論とは正反対の立場にいる人だから十分に納得のできる証拠がなければこれはむずかしいことだと思ふ。しかし、よく読んでこのことが立証されているかどうかを見きわめたいと思ふ」という文章である。この道徳問題に対するエマソンの異常に強い関心がやがてユニテリアニズム批判に発展したことは彼の日記や手紙の文面から明らかである。二、三の例証をあげるならば、一八二三年の日記のなかで彼は、「……消え去つてゆく多くの現象のなかで……真実で、永続的なものは……正邪の区別だけである。その他のすべてのことについての意見やこの世のなかのことについての感じ方は、少年時代、壮年時代、老年時代というように、年齢とともにたえず變つてゆくが、正邪についての人々の理解は決して變らないものだ」と書き、また、翌年の日記のなかでは、「いかなる神を信しても、何派の礼拝形式にしたがつても、国とか、時代とかを問わずに、牧師がこれほど勝手な悪口を言われ、深い疑惑をこらむらなければならないとは、一体、どうしたわけなのだろうか。……たしかに、メンフィスからボストンまでの間にある千以上もの教会における敬虔な信仰告白者達は極悪非道の無類漢達であつた。それとも、その悪の根源はさらに深いところにあつて、信仰告白そのものの本質のなかにあるのだろうか」と信仰告白に対する疑問さえも提出している。また、ある友人に書き送つた手紙のなかでは、「……天与の才能と知識とがボストンの牧師達の口から洪水のようにあふれ出てくるが、キリスト教の光は失わ

れている。……私がケンブリッジ（私註―ハーヴァード大学の神学部をさしている）に入学して、神学を研究したならば、ルター（Martin Luther）や、カルヴィン（Jean Calvin）や、現代の自由主義神学を信奉する人々のものよりも、なにかすぐれた神学の体系を自分の力で作り出せるかどうかをお知らせしましょう」と書いている。このように当時の宗教界の空気にあきたりないエマソンは直接に神との交渉を求めた。そのためにハーヴァード大学で、熱い信仰心に燃えるユニテリアン派の学者であるノートン（Andrews Norton）教授について神学の研究をしても何等の得るところもなかった。それは、一八二六年にユニテリアン派の牧師として説教の免許をうける直前に彼が大きな影響をうけた伯母メアリー・ムーディ（Mary Moody）に宛てて、つぎのような手紙を書いていることからもうかがわれる。すなわち、「……こういうように時間を神と我々との間において、あまりにも歴史的な光のなかで自分達を見ることは間違いのようです。あらゆる瞬間を新しい瞬間であると考え、すべてのことを神から神意の遵奉者の心へと瞬間毎に訪れる黙示であると考えるほうがはるかに適切であるように思えます。」^⑧

この頃のエマソンの心のなかを去来するものは当時の宗教界の空気に対する不満足とか怒りとかいふよりはむしろ淋しい孤独感であったことは彼の詩から明らかである。

I am an exile from my home ; heavily

And all alone I walk the long sea shore

And find no joy. The trees the bushes talk to me

And the small fly that whispers in my ear.

Ah me I do not love the look

Of foreign men

And wo is me that I forsook

My little home my lamp my book

To find across the foaming seas

This cheerless fen.

(December 7, 1827)

故郷を遠く離れてをすらしう私は

重き足どりげ、たたひとら

はてしなくつづく海辺をみるごとくも

よろこびを見出たせなう

樹々や草むらは語りかけ

小さな羽虫は耳もとでささやきかける

あゝ、私は異国の人々の顔がきらいた

ささやかな家と、ランプと、書物をすてて

泡立つ海をわたってきても

こんなわびしい沼地を見出たすとは

私は呪われている。^⑤

この詩のなかで歎いているように努力して求めても『神』を見出だせない悲しみにうたれるエマソンは、「神とは何か。この質問を提出する人間にふさわしい畏敬の念をいだけて私は質問したい」と自分自身に問いかけている。ついでながらこのようなエマソンの態度から彼はストア精神以外のものを理解できない男だと考えるのは誤りである。このことは本稿に於ては直接には関係のないことであるが、エマソンという人物を考へるときには念頭においておかなければならないことである。彼自身の言葉によると、「私の習慣はストイックの掟よりも、エピキュリアンの掟にしたがっている」のであり、「神を礼拝する者は徹底的に真面目でなければならぬ」と思う人は自然の大部分を見落している。真面目一方の人間はふざけてばかりいる人間と同じように完璧な性格の持主とは言えない。滑稽なものによって示される真理も多い。知的社会にはユーモアと機知とが豊富にあらわれてくるものだ。神の摂理について十分に広い視野をもつ人、野原に出て朝や春のよろこばしい美しさを眺めたり、夜のパーティに参加したりする人は、神の子達が互に他人を避けたり、悲しげな顔つきをしたりするのを見て、それは神の意志ではないと感じないではいられないはず^⑧なのである。

一八三一年に正牧師に任命されたとき、周囲の神学者や牧師達の態度に失望して、独自の考え方を押し進めて神のもとへ参入しようとしたエマソンは日記に自己信頼の情を吐露してこう書きつけた。「理性を信頼しないこと、思考を恐れること、他人の言説に頼ることなどは敬神の証拠であり、自分自身を信頼することは神に対して不敬の証拠であるというような教義はまさに自殺的な教義である。自分自身を信ずることは、自負ではなくて敬神である。すなわち、神以外のなものをも学ぼうとはしない態度なのである。」^⑨そして、これより少し前の日記に、「自分自身の内部に感じられるあの刺戟を信頼せよ。いまだかつてそれを超越できた者は誰もいない。人々はそれを犯し、憎み、冒瀆したことはあるが、それが頭上に聳え立って、破滅させるぞと脅かすのを感じない

で罪を犯した者は一人もない」と記した彼はまた、「我々の心のなかにある神が『神』を礼拝するのだ」とも書いた。このように自分自身を知ってそれを信頼せよという考え方にエマソンは到達したのであった。そして、これこそ彼の根本思想と言えるものである。自分自身の心のなかに神があると信ずるところはクエーカーの教義を思い起させるが、その通りであって、この点は伯母メアリ・ムーディの影響であると考えられる。クック (George Willis Cooke) も「エマソンの道徳観はクエーカー教徒の内なる光、プロティノスの忘我歓喜、スウェーデンボルグの神の啓示を思わせる」と指摘している。この問題をここで論ずることは当を得ないように思われるから稿を改めて論じたい。七月六日の日記のなかに『自分自身を知れ』という詩を彼は書きとどめているが、この時に彼の思想的立場は確立されたものと見てもよいであろう。その意味でこの詩は重要なものだと考えられるからここにその全文を引用することを許して頂きたい。

Thou! Thou! ⑤

If thou canst bear

Strong meat of simple truth

If thou durst my words compare

With what thou thinkest in the soul's free youth

Then take this fact unto thy soul ...

エマソンのエニテリアニズム批判について

God dwells in thee ...

It is no metaphor nor parable

It is unknown to thousands to thee

Yet there is God.

He is in thy world

But thy world knows him not

He is the mighty Heart

From which life's varied pulses part

Clouded & shrouded there doth sit

The Infinite

Embosomed in a man

And thou art stranger to thy guest

And know'st not what thou dost invest.

The clouds that veil his light within

Are thy thick woven webs of sin

Which his glory struggling through

Darkens to thine evil hue

Then bear thyself, o man!
Up to the scale & compass of thy guest
Soul of thy soul.
Be great as doth he seem
The ambassador who bears
The royal presence where he goes.
Give up to thy soul ...
Let it have its way ...
It is, I tell thee, God himself,
The selfsame One that rules the Whole
Tho' he speaks thro' thee with a stifled voice
And looks thro' thee shorn of his beams
But if thou listen to his voice
If thou obey the royal thought
It will grow clearer to thine ear
More glorious to thine eye
The clouds will burst that veil him now

ヘレンのトヒチアニア報第22号

And thou shalt see the Lord.

Therefore be great

Not proud, too great to be proud

Let not thine eyes rove

Peep not in corners; let thine eyes

Look straight before thee as befits

The simplicity of Power.

And in thy closet carry state

Filled with light walk therein

And as a King

Would do no treason to his own empire

So do not thou to thine.

This is the reason why thou dost recognize

Things now first revealed

Because in thee resides

The Spirit that lives in all

And thou canst learn the laws of Nature
Because its author is latent in thy breast.

Therefore o happy youth

Happy if thou dost know & love this truth

Thou art unto thyself a law

And since the Soul of things is in thee

Thou needest nothing out of thee.

The law, the gospel, & the Providence,

Heaven, Hell, the Judgment, & the stores

Immeasurable of Truth & Good

All these thou must find

Within thy single mind

Or never find.

Thou art the *law* ;

The *gospel* has no revelation

Of peace or hope until there is response

From the deep chambers of thy mind thereto

ヘレンの心の中に
福音は啓示なし

The rest is straw

It can reveal no truth unknown before.

The *Providence*

Thou art thyself that doth dispense

Wealth to thy work Want to thy sloth

Glory to goodness to Neglect the Moth

Thou sow'st the wind, the whirlwind reapest

Thou payest the wages

Of thy own work, through all ages.

The almighty energy within

Crowneth Virtue curseth Sin

Virtue sees by its own light

Stumbleth Sin in selfmade night.

Who approves thee doing right?

God in thee

Who condemns thee doing wrong?

God in thee

Who punishes thine evil deed?
God in thee

The selfsame God

By the same law

Makes the souls of angels glad

And the souls of devils sad

See

There is nothing else but God

Where e'er I look

All things hasten back to him

Light is but his shadow dim.

(July 6, 1831)

自分自身を知られ

君が真実とどう強烈な食物に

ヘマンソンのユニテリアニズム批判について

エマソンのユニテリアニズム批判について

たえることができるなら

君が若々しい魂のなかで考えているものと

私の言葉とをくらべてみるだけの勇気があるなら

このことを決して忘れないようにするがいい――

神は君自身のなかに住んでいるということ。――

これは比喩でもない、たとえ話でもない

多くの人々も、君自身も、このことを知らない

しかし、神は存在する。

神は君自身の世界のなかにいるのだが

君の世界は神の存在に気がつかない

神とは、多くの生命の鼓動がそこからわかれてゆく

大きな「心臓」だ

雲につつまれ、かくされていても

「限らないもの」が人の心の奥に住んでいる

しかも、君は君自身のなかの客を知らない

何をなかに包んでいるかを君は知らない。

君のなかで君の客の生命の光をかくしている雲は

幾重にもはりめぐらされた君の罪悪の網の目だ

あの客の輝く光は、その網の目を通りぬけようともがきながら
君の罪悪のために、暗く黒ずんでしまふ

それだから、人間よ！

君の客である君の魂のもとの「魂」の大きさにあわせて行動するがいい。

どこへ行っても堂々としている

この使節にふさわしく

偉大であれ

君の魂に君自身をまかせたまえ――

その支配にしたがうがいい――

たしかに、君の魂こそ「神」自身だ

君という人間を通して、息をこらして語りかけ

君という人間を通したために、光を奪われて外を見ているが

彼こそ、「すべて」を支配するあのひとつの「神」なのだ

しかし、もし、君が彼の声に耳を傾け

その高貴な思想にしたがうならば

彼の声は君の耳にいよいよ澄んで聞こえるようになり

彼の光は君の目にいよいよ燦然と輝くようになるだろう

彼をかくしている雲は裂けて

君は「主」を見るようになるだろう。

それ故に偉大であれ

高慢であってはならない、高慢を軽べつするほどに偉大であれ
しっかりと君の目を見るがいい

片隅をのぞきこむな。

純真誠実な「力のもとなる神」にふさわしく

君の前途をまっすぐに見たまえ。

私室のなかでも威厳を失わないで

光にみちあふれて歩むがいい

そして、「帝王」が自分の帝国を裏切ろうとはしないように

君も自分の国を裏切るな。

はじめて啓示されたことを

君がよく理解できる理由は

すべてのなかに住む「霊」が

君自身のなかにも住んでいるからだ

そして、君が「自然」の法則を学ぶことができるのは

その法則をつくったものが君の心のなかにひそんでいるからだ。

それだから、幸福な若者よ

君がこの真理を知って愛するなら、君は幸福だ
君は君自身にとって一つの法則だ

万物の「魂」は君の心のなかにあるから

君は君自身のほかにはなにも必要としない。

法則、福音、「神の摂理」、

「天国」、「地獄」、「最後の審判」、

「真理」と「善」の限らない宝庫

こういふすべてのものを

君のただひとつの心のなかに見出さなければならぬ

さもなければ、ほかのどこにも見出たせないからだ。

君自身が法則だ。

君の心の奥の部屋からの答がなければ

福音も

平和や希望を啓示することはない

そのほかのものは薬くすだ

それは未知の真理を啓示できない。

「神の摂理」を施すのは

君自身にはかならない

君の勤労には「富」を、君の怠惰には「欠乏」を

善には「栄光」を、「怠け心」には蛾をさすける

エマソンのユニテリアニズム批判について

エマソンのユニテリアニズム批判について

君が風を降けは、君は旋風を刈りとる

いつの時代にも、君は

君自身のなせるわざの代価を支払う

内なる全能の力が「徳」を完成させ、「罪」をのしる

「徳」はみずからの光でものを見る

「罪」はみずからつくりだした闇夜のなかでつますいている。

君が正しいことをしていると認めるのは誰なのか。

君の心のなかに住む神なのだ

君が不正をしていると非難するのは誰なのか。

君の心のなかに住む神なのだ

君の邪悪な行為を罰するのは誰なのか。

君の心のなかに住む神なのだ

あまねく同じこの「神」が

同じ法則によって

天使達の魂を喜ばせ

悪魔達の魂を悲しませる

見たまえ

「神」のほかには何ものも存在しない

どこを私が見ても

すべてのものが、神にこそいで帰ってゆく

光も神のおほろけな影にはかならない。

このように自分自身のなかに神を見出したエマソンは、「神学はイエス・キリストに対する愛を義務として主張することによってキリストを傷つけた」と断定するにいたった。そして、さらにすすんでエマソンはつぎのように教派というものを批判した。「なにか一つの教派に所属することは賢明なことでもなければ、自然なことでもない。聖書はユニテリアンになれとか、カルヴィン主義者になれとか、監督派教会員 (Episcopalian) になれとかとは規定しない。賢明な人ならば、世間に向って、私はユニテリアンだなどと公言するようなことはしないであろう。そればかりではなく、むしろ、自分自身に向って、ユニテリアン派の信徒でも、また、いずれの派の信徒でもない語りかけるであろう。私は神の子であり、キリストの弟子である。いや、神の眼から見れば、私とキリストとは兄弟弟子である。…自分自身の情念を完全に支配するのが私のなすべきことなのだから、私は禁酒運動を推進する教派とか、女性に対する無節操を禁圧する教派のほうか、ユニテリアニズム禁止運動をする正統派や、有用な知識の普及をはかるユニテリアン派などよりも、はるかに合理的で、役に立つ教派だと考えざるを得ない。」^④あくまでも、エマソンにとっては、「心こそ唯一の世界であり、宇宙である。心の欲求がみたされる」と、いかなる欠乏も感じられなくなる。しかし、大げさな宗教的見世物のもとでは、愛はなんという些細なものになってしまうことだろう。会衆、教会、説教、——これらはなんというひどいごまかしだろうか。たしかに、

愛というものがこれらのものをつくりあげたのだ。これらのものは人間の心がつくったものなのだ。しかし、これらのものをつくりあげた熱烈な世代はもはや過ぎ去り、すべてのものは墮落し、形式だけが残り、魂はほとんど消え去ってしまっている。現代のカルヴィニズムは高慢と無知からなりたっているのではないだろうか。ユニテリアン派はひとつの教派としてはカルヴィン派に反対することでありたっている。ユニテリアニズムは論争のために下劣な炎で活気づいているときは別として、冷たくて、陰気くさい^④ものであった。そして、一八三一年十月二十一日のエマソンの説教はラスクの書いているところによれば、「その説教全体は、すべて、自恃の精神の賛美であった。ウォルドー・エマソンは形式主義と、教会と、伝統の権威とを攻撃していた」^⑤のであった。

このような考え方をすすめて、エマソンは日記に、「牧師をしていることに強く反撥するのは、自分のなかの最善の部分ではなかるうかと時々考える。自分の心のなかの善が職務上の善に反撥するのである」と書くにいたった。そして、それと同時に教会の行事を無反省にとり行うことは、自分の権威を教会の意志に捧げることではないかという疑惑を抱きはじめた。元来、ユニテリアン派は理性的宗教として出発し、旧来の教会の儀式や行事を整理したが、ただ、会衆に代って牧師が祈禱することと、主イエス・キリストの最後の晩餐にかたどる聖餐式だけは保存していた。しかし、これらはいずれも、エマソンの良心には許せないものであった。かくして、一八三二年六月、エマソンは聖餐式に葡萄酒やパンを使用することをやめて、ただ、教祖を記念する式典として、聖餐式をとり行うことを提案したが、教会の会議でこの提案は否決されてしまった。このことに関して、一八三二年九月五日の最後の説教に於て、エマソンはこう述べた。「私はこの制度に敵意をもつものでありません。私は、ただ、自分がそれに同意しないのだと言っているだけです。もし、私が、職務上、この式典を執行するように要求されるのでなかったら、自分の意見を他人に押しつけるようなことはしなかったでしょう。この行

事が人々をよろこばせ、天国をよろこばすものならば、この世の終りまでも喜んでこの行事をつづけましょう。そして、それがもたらすあらゆる善を祝福しましょう。」^⑧このおだやかな言葉の背後にはするどい戦闘的性格と恐れることなく自己を主張しようという徹底的な精神とがかくされていることは明らかである。エマソンの宗教学論によると、宗教はあくまでも、個人的、内面的な経験であるから、外面的な儀式はすべて根柢をもっていないことになってしまふのである。そして、この理論の最初の実践は牧師辞任という形であらわされた。ただ、会衆哀惜のうちに、聖餐式問題を理由に教会を去るまでのエマソンの態度は、すべて、ユニテリアン教会の常識の範囲をこえるものではなかったことは記憶されなければならない。また、彼が態度を表明するのに、かなり長い期間にわたって、いかに悩み苦しんだかはその頃の日記に明らかであるが、これも忘れてはならない。「今や、決断の時機だ。……イエスは彼自身を記念することは意義のあることだろうと思われただけで、特別に、永久不變の一定の儀式を制定なさるつもりはなかったのだと私は考える。しかし、一般の人々はイエスがこの聖餐式を制定されたのだと考えている。……あまりにも良心的になりすぎて、些細なことにこだわるのはよくないし、ただということを私はよく心得ている。……しかし、この儀式は宗教制度のなかで、もっとも神聖なものだと見なされている。人々がもっとも神聖視しているこの制度を、ただ、習慣的に、冷淡に、不承知ながら行ないつづけるわけにはゆかない」といふ彼の結論は一八三二年七月の日記に書きしるされた。

一八三二年十月に辞任が認められたときに、彼は兄ウィリアム・エマソン (William Emerson) に手紙を書いて、「私を教会に結びつけていた強い絆が切れたことは、両者にとって、この上ない救いです」と告白している。そのときまでの身心にともった疲労の回復と自己の信念の確認のためにヨーロッパに向けて旅立つ直前に、エマソンは自分の信念を詩の形に定着させた。

I will not live out of me
I will not see with others' eyes
My good is good, my evil ill
I would be free — I cannot be
While I take things as others please to rate them
I dare attempt to lay out my own road
That which myself delights in shall be Good
That which I do not want, . . . indifferent,
That which I hate is Bad. That's flat
Henceforth, please God, forever I forego
The yoke of men's opinions. I will be
Lighthearted as a bird & live with God.
I find him in the bottom of my heart
I hear continually his Voice therein
And books, and priests, and worlds, I less esteem
Who says the heart's a blind guide?
It is not.
My heart did never counsel me to sin

I wonder where it got its wisdom
For in the darkest maze amid the sweetest baits
Or amid horrid dangers never once
Did that gentle Angel fail of his oracle
The little needle always knows the north
The little bird remembereth his note
And this wise Seer never errs
I never taught it what it teaches me
I only follow when I act aright.
Whence then did this Omniscient Spirit come?
From God it came. It is the Deity.

(Oct. 2, 1832)

私は自分から離れて生きようとは思わな
他人の目でもものを見ようとは思わな
私の善は善であり、私の悪は悪である
私は自由になりたい——他人が喜ぶようにものを考える間は
自由になり得ない
勇気を出して、私の道を自分でつくろう

エマソンのユニテリアニズム批判について

エマソンのユニテリアニズム批判について

私が喜ぶものは「善」であり

私が望まないものは、どうでもいいもの

憎むものは「悪」である。

私が言うことはこれだけだ

「神」よ、これからは、他人の意見という枷を

永久にすて去ろう

小鳥のように心も軽く、私は「神」と共に生きよう。

私は自分の心の奥底に神を見出だして

そこに、神の「声」をたえず聞く。

書物も、牧師も、世界も、たいしたものではない

心は盲目の道案内だと誰が言うのか。

そうではない。

私の心が、私に、罪を犯すようにすすめたためしはない

私の心が、どこで、その知恵を得たのかと、不思議に思う

暗い迷路のさなかで、甘い誘惑にかこまれながら

あるいは、おそろしい危険のなかで

あのやさしい「天使」が神託を告げてくれないことはなかったから

小さな磁針はいつも北を指し示し

小鳥は歌を忘れない

そして、この賢明な「予言者」は誤りを犯さない

それが教えてくれるものを、私は他人に教えたことはない

私が正しく振舞うときには、それにしたがうだけ

それでは、この「全知の霊」は何処からきたのだろうか。

それは神からきたものだ。それが「宇宙創造の神」なのだ。^⑧

そして、パリの宿舎で、「道徳的真理のもつ神聖な美しさを人々に理解させるためには、現在見られるような伝統的キリスト教の誤謬と、何百万という人々の通俗信仰とを除き去ることが必要である。健康と機会さえあれば、真理は真理自身を証明していること、神に関する信条は書物に頼らなくてもいいこと、キリスト教は、これを教理の体系と考えている人々によって、誤った形でうけいれられていること、キリスト教が強調するのは道徳的真理であり、キリスト教とは信仰の法則ではなくて、生命の法則であること——以上のことを立証する仕事に献身することを私は誓いたい」と日記のなかで自分自身に誓を立てた。

以上の引用例にみられるような信念をエマソンは日記とか手紙とかいう私文書のなかで述べているだけではない。すなわち、牧師を辞任したという明白な事実に加えて、『神学部講演』に先立つ三つの公開宣言があったことを忘れてはならない。ウィッチャー (Stephen Wicher) が指摘しているように、エマソンの真意の一部は二つの説教、すなわち、一八三三年の『宗教と社会』*Religion and Society* と一八三四年の『人間の存在の奇蹟』*The Miracle of Our Being* とにおいて宣言された。そして、第三番目の公開宣言は一八三七年の宗教についての講話のなかに含まれている。エマソンは一八三七年の大部分は不定期ではあるが、年間を通じて説教を行っていた。^⑨しかし、翌年には、「説教、とくに、いつわりの説教は、有能な人間にとっては、わずらわしい仕事にすぎない」と言って、説教を行わなかった。^⑩

このように顧みてくると、長年の期間にわたって、『神学部講演』のアウトラインを辿ることができると、この『神学部講演』では、エマソンは信念という城塞に立て籠って挑戦を宣言したのであったということができよう。その四ヶ月前の日曜日に彼は教会の礼拝に列席して、「私は坐って考えるべきだ。そして、アメリカの牧師達に講演を行って、現代の神学と教会の醜悪、無益なさまを彼等に示し、彼等がほとんど締め出されてしまっている輝かしく香わしい道徳性を彼等に教え示してやろう。」と考えた。

この『神学部講演』で彼が主張したことは個人の霊の權威であって、彼はあらゆる歴史的信条や教会に対抗して個人を主張し、個人のなかの霊を精神問題の最高の審判者たらしめようとした。そのためエマソンは二つの主な欠点をこの挑戦において弾劾した。

第一に、美德と真実との独占、すなわち、個人の心に宿る霊の神聖を無視するほどに宗教儀式を誇張して人間を欺くことを非難した。『神学部講演』のなかから、その部分を引用しよう。「イエス・キリストは真実の予言者の一人であった。彼は眼をあけて魂の神秘を見た。そして、その厳肅な調和に心を奪われ、その美しさに恍惚として、この魂の神秘のなかに生きつづけた。人類史上、ただイエス・キリスト一人だけが人間の偉大さを認識したと言える。彼一人だけが諸君の心のなかにあるものと、私の心のなかにあるものに対して誠実であった。イエス・キリストは神自身が人間に化身してその世界を支配するために、つねに新しく進み出てくるということを悟った。イエス・キリストはこの崇高な喜びにあふれて語った。『私は神聖である。私を通して神の御手は働き給い、私を通して神は語り給う。神を仰ぎたいと思うなら私を見なさい。あるいは、あなた自身を見なさい。もし、あなたもまた現在の私と同じように考えるならば、あなた自身のなかに神を見るでしょう。』^⑧しかし、イエス・キリストの時代、その次の時代、その後の時代には、彼の残した教義と思い出とは何と歪められてしまった

ことであろうか。……このように見てくると、歴史的キリスト教の第一の欠点が分かってくる。歴史的キリスト教は宗教の精神を伝えようとするあらゆるところをそこなう誤謬に陥っている。我々の眼にうつり、また、長年の間、人々の眼にうつってきたところによると、歴史的キリスト教は魂の教義ではなくて、個人的なもの、実証的なもの、儀式的なもの誇張にすぎない。キリスト教は、今も昔も、人々の心をそこなう誇張的な言葉でイエス・キリストの『人物』について語っている。魂は人物などというものを知らない。魂は宇宙全体の広さままで拡大するようあらゆる人々をうながし、自然に湧き出る愛よりもすぐれたものを認めようとはしない。……イエス・キリストという名は、昔はあふれ出る称賛と愛をもつて、人々の口にされたが、今日では、冷たい役人の肩書のようになって、人々の暖かい同情と愛の心とを殺してしまっている。私の言うことに耳を傾ける人々が、みな、感ずることだが、ヨーロッパ、および、アメリカにおいて、イエス・キリストについて語られる言葉は、善良で高潔な心の持主に対する友情にあふれた熱意のあるものではなく、独占的、形式的なものになっている。」^⑤

第二に、エマソンはイエス・キリストその人の精神を限定的に狭く解釈することに反対している。このことについての彼の言葉を、ふたたび、『神学部講演』から引用しよう。「伝統的な限られた方法によってキリストの精神を解釈するという第二の欠点は必然的に第一の欠点から生まれてくる。それは、道徳性、すなわち、これが啓示されると開かれた魂に偉大な心である神自身を導き入れるのだという大法則とも言うべきものが、社会における教育の根本義として究明されていないという事実である。人々は啓示ということについては神が死んでしまっているかのように遠い昔に与えられて、今ではもう存在しないものとして語っている。説教者が信仰をそこなうようなことを言うと、彼は息の根をとめられてしまい、もっともすぐれた学院と言える教会は、不確実で不明瞭

な声しか聞くことのできない場所になりさがっている。」^⑧

要するに、イエス・キリストの福音の中心は瞬間毎に各人が神であるということの人々に知らせるといふ点におかれていたのであるが、歴史的キリスト教の誤謬は、この福音が永遠に真実であることを忘れて、千九百年以前のユダヤで、ただ一回だけ語られたものとみなしている点にあると彼は考えた。講演の進むにつれて、歴史的キリスト教の誤謬に対するエマソンの糾弾は激しくなっていた。他方、これらの歴史的、伝統的な二つの欠点に対して、エマソンはキリスト教の計り知れないほど大きな長所を二つあげてそれらを相殺させた。すなわち、第一に、霊的存在としての人間の尊厳をあらゆるところですべての人々に与えている世界の祭典とも言える安息日 (Sabbath) の設定であり、第二に、説教を行うことである。エマソン自身の言葉を『神学部講演』からかりよう。「キリスト教は二つのこの上もない長所を我々に与えてくれた。第一は安息日、すなわち、全世界の祝祭で、その光は哲学者の書齋にも、賃仕事をしている屋根裏部屋にも、監獄の独房にも、同じように喜び迎えられる輝き、いたるところで、下賤な人々に対してさえも、精神的なものもつ尊厳さを暗示している。我々は安息日を永遠に教会として保存しなければならない。新しい愛、新しい信仰、新しい眼識がこれを再建し、人類にとって最初は輝かしいものであった安息日をさらにそれ以上のものにするであろう。第二は説教という制度である。説教とは人々に向けてなされる話で、本質上、すべての機関、すべての形式のなかで、もっとも人の意のままになしうるものである。今や、説教壇で、講義室で、家庭で、田畑で、人に招かれるにせよ、諸君みづからその機会をつくるにせよ、いたるところで、諸君の人生と良心とが教えるままに真理を語り、それを待ちこがれて力を失った人々の心に新しい希望と啓示とを吹きこんで彼等を力づけてやるときである。それを妨げるものがあるうか。」^⑨

『神学部講演』のなかでエマソンは牧師の怠惰と頑迷とに対しては非難を極めていますが、牧師の使命そのものに対してはつねに崇敬の念をもって語っている。その使命は神聖な公職であり、世のなかの最高の職務であると彼は考え、牧師の生命的で神聖な役割について意見を述べるときには情熱的で雄弁でさえある。そして、それに比例してエマソンが教会の精神的饑餓に絶望するときには烈しい苦悩がみうけられる。「我々の教会の精神的饑餓に対して、すべての思慮ある人々は心の眩きを抑えかねている。また、道徳性を培うことによってのみ与えられる慰安と希望と尊厳とが奪い去られていることを彼等は歎いているが、今や、怠惰な眠りより目覚め、常習的な日常生活の騒音を打ち破って、この眩きと歎きの声を大にすべきときである。説教者の偉大な永遠の務めは果されていない。説教とは道徳心を如何に人生の義務に対して用いるべきかを語るものである。どれほど多くの教会のなかで、どれほど多くの予言者によって、人々は、自分が無限の靈魂であり、天地が心のなかに入ってきて、自分が永遠に神靈を飲むものであることを教えられたであろうか。どこで、今、説教の聲が高鳴り、その調べによって、私の心を楽園にみちびき、この説教が天国より流れ出たものであることを証明しているであろうか。昔、人々を誘って、すべてのものを、父母、家庭、国家、妻子までも捨ててしたがわたしたちの言葉はどこに響いているのであろうか。どこで道徳に関するこの厳肅な法則が私の耳一杯に告げられるのを聞き、私の力かぎりの活動と情熱とを捧げて、自分が高められるのを感じることできようか。真の信仰は自然の法則が手の運動を統御するように信仰の力が魂を魅了し、これを支配するか否かによって見分けられる。真の信仰はおかしがたい力をもっているために、我々はよろこんで服従し、服従することを名譽と思うほどである。この信仰は、暁の光、日没の光、飛びかう雲、歌う小鳥、草花の息吹と融和している。しかし、現在の牧師が執行する安息日の礼拝は自然の光彩を失っているので美しくない。我々は教会の席に腰をかけていても、牧師とは無関係に、自分達

だけのはるかに良い、聖い、美しい礼拝をすることができるとし、また実際に、そうしている。」^⑧

つづけて、エマソンの胸の奥にひそむ宗教心が彼に叫ばせる。「善人は教会を愛し、悪人は教会を恐れていたが、今日では教会自身がそういう力を喪失している。……宗教上の集会に参加しないことが、品性や宗教をもっていることを示すようになっていく。安息日を重んじていた信仰のあつい人が、悲痛な調子で、『日曜日には教会へ行くことが悪いことのように思われる』と言うのを聞いたことがある。……諸君、私はこの二つの誤謬が教会を衰微させ、信仰をすたれさせる原因であると思う。神を礼拝する心を失うこと以上に大きな災害が国民の上にかかることがあるだろうか。そのときには、すべてのものが亡んでゆく。天才は教会を去って、議會や、市場へ出入りする。文学は軽佻浮薄になり、科学は冷酷無情になる。青年の眼はもうひとつの世界の希望の光によって照らされることがなく、老人は尊敬されない。社会は些細なことを中心にして動き、人々の死も我々の口にはのぼらなくなるのだ。」^⑨

エマソンは説教者達に、權威と形式主義という目かくしを取り去って、神を直接に仰ぎ見るようにと命令する。しかし、エマソンが嚴然として新しい儀式をもつ新しい礼拝様式を制定することに反対の旨を宣言していることを我々は銘記しなければならぬ。すなわち、『神学部講演』でエマソンはこう主張する。「さて、祭壇の火はくすぶり、ほとんど消えかかっているが、これにふたたび点火するためにできるだけのことをしようではないか。現在、教会に悪弊が見られることは明らかである。問題は我々が何をなすべきかということである。私は正直に言うが、新しい儀式と形式とを考え出して新しい礼拝様式を制定しようとするあらゆるところは無意味であるように思われる。信仰が我々をつくるので、我々が信仰をつくるのではない。そして、信仰は信仰自身の形式をつくる。礼拝様式を制定しようとするあらゆるところは、フランス人によって理性の女神に捧げられるように

なった新しい礼拝様式と同じように冷酷無残なものである。今日という日はこわれやすい紙製品や、すかし細工のようなものであり、明日という日は狂気や、殺人のうちに終ってしまう。むしろ、諸君が新しい生命の息吹きを既存の形式に吹き込むほうがよい。諸君がひとたび活発に動けば、これらの形式は諸君の思うままになり、また、新しいものになるからである。墮落した形式を救うものは、一にも魂、二にも魂、永遠に魂である。道徳の脈搏がひとつ打てば、形式という法王の国全体を助け起して、活をいれることが出来る。」^⑧

このように見てくるとエマソンが反対したものはユニテリアニズムそのものではなくて、それらの屍体とも言える単なる形式主義であり、その青白い否定的な態度であり、祭壇の火を消し、怠惰な、型にはまった消極的な牧師をつくった形式主義にともなう冷たい頑迷であることは明らかである。そして、この革新的な『神学部講演』は、マシーセン (Francis O. Matthiessen) の言ったように、彼を「そのときまでに、エマソンに対してなされたなかでもっとも個人的な攻撃的」にしたのであった。

(註)

- ① Frothingham, Octavius Brooks: *Boston Unitarianism 1820-1850*, G. P. Putnam, 1890, p. 61.
- ② Rusk, Ralph L.: *The Life of Ralph Waldo Emerson*, Columbia University Press, 1949, p. 267.
- ③ Rev. & Dr. Richard Price (1723-91)
- ④ Emerson, Ralph Waldo: *Journal*, March, 1821.
- ⑤ *Ibid.*, January, 1823.
- ⑥ *Ibid.*, Undated (January or February, 1824)
- ⑦ Miller, Perry: "From Edwards to Emerson" in Charles Feidelson, Jr. & Paul Brodtkorb, Jr., eds.:

Interpretations of American Literature, Galaxy Books, 1959, p. 132.

- ① Whicher, Stephen, ed.: *Selections from Ralph Waldo Emerson*, Riverside Edition, 1957, p. 8.
- ② Emerson : *Journal* December, 1827.
- ③ *Ibid.*, February, 1828.
- ④ *Ibid.*, July, 1828.
- ⑤ *Ibid.*, March, 1831.
- ⑥ *Ibid.*, July, 1831.
- ⑦ *Ibid.*, April, 1831.
- ⑧ *Ibid.*, July, 1831.
- ⑨ Cf., Cooke, George Willis: *A Bibliography of Ralph Waldo Emerson*, N. Y., 1908.
- ⑩ "Know Thyself"
- ⑪ Emerson. *Journal*, July, 1831.
- ⑫ *Ibid.*
- ⑬ *Ibid.*, June, 1831.
- ⑭ *Ibid.*, October, 1831.
- ⑮ Rusk: *op. cit.*, p 164.
- ⑯ Emerson: *Journal*, January, 1832.
- ⑰ Emerson: *Last Preach*, September, 1832.
- ⑱ Emerson: *Journal*, July, 1832.
- ⑲ Emerson's Letter to William Emerson, November, 1832.

- ⑳ Emerson: *Journal*, October, 1832.
- ㉑ *Ibid.*, July, 1833.
- ㉒ Cf., Whicher, ed.: *op. cit.*
- ㉓ Rusk: *op. cit.*, p.267.
- ㉔ Emerson: *Journal*, 1838.
- ㉕ Rusk: *op. cit.*, p.267.
- ㉖ St. John, 14: 10-11.
- ㉗ Van Doren, Mark: *The Portable Emerson, An Address*, The Viking Press, N. Y., 1962, p.53.
- ㉘ *Ibid.*, pp. 54-55.
- ㉙ *Ibid.*, p. 57.
- ㉚ *Ibid.*, pp. 67-68.
- ㉛ Matthew 10: 35-37.
- ㉜ Van Doren, Mark: *op. cit.*, pp. 58-59.
- ㉝ *Ibid.*, pp. 62-63.
- ㉞ *Ibid.*, p. 67.
- ㉟ Matthiessen, Francis O.: *American Renaissance*, Oxford University Press, 1941, p.9.

三

エマソンのユニテリアニズム批判に対する同時代の人々の反応はどのようであったか。元来、このときの神学

部における講演は「神学部上級生に対して、キリスト教の牧師としての門出を祝うために行われる慣例的なものであり、神学部当局は平凡な講演をエマソンに期待していた」^①のであった。卒業予定者は六名にすぎなかったが、ほかに、現職のユニテリアン派の牧師達や、学生達が自由に聴講できるものであった。エマソンは講演受諾の旨を三月二十七日に通告してから、まもなく、神学部で学生達と神学についての討論を行ってみた。「そのとき、学生達が七月十五日の講演を、たとえ部分的になりとも、予想できなかったということには彼等が如何に愚劣であったかを示している」^②とラスクが指摘しているが、慎重なエマソンがどの程度の討論をしたかは明らかではないにしてもたしかにその通りであろう。一八三八年七月十五日にこの講演が発表されると、大部分のニュー・イングランドの自由主義派の牧師達、すなわち、おもに、ユニテリアン派の牧師達は深刻な衝撃をうけ、ハーヴァード大学の神学部長ポールフリー（John Gorham Palfrey）教授はこの事態にひどく悩み、この講演を愚劣と無神論との混合物だと酷評した。多くの一般の人々もエマソンを不信心者、無神論者、異教徒、危険分子だと攻撃し、教会を危殆に瀕させ、ユニテリアン派を崩壊させた男だと非難し、はては狂犬だとのしる者さえも出てきた。ここで二、三の主要な例をあげておこう。

当時の神学部教官で、以前に第二ユニテリアン教会でのエマソンの同僚であったウェア（Henry Ware Jr.）はエマソンに対して、強硬な警告を発したが、エマソンは自分の教義は真実であると確信しているからそれが実行に移されることこそ必要なことであると返信した。しかし、この講演の出版に際しては細心の注意を払って修正したいとエマソンは答えている。ウェアは、さらにすすんで、超絶主義という異教から神学部学生を守るための説教をつくり、その写しをエマソンに送って、論争を挑んできたがエマソンはそれをことわった。神学部の学生達は事態に仰天して、躊躇しながら、この講演の写しを三百部だけ印刷したが、それを出版するだけの勇氣をも

たなかった。^⑧この『神学部講演』のために、エマソンはその後三十年間、ハーヴァード大学の神学部で講演をすることを禁止され、牧師生活に復帰する可能性もまったく失ってしまった。ついではながら、エマソンのコンコードにおける最終説教は一八三九年一月二十日に行われ、それ以後の彼の職業は著述業、講演業に限定されるにたつた。しかし、逆説的にエマソンはその尊敬者達からよりも、その反対者達から一層強い立場に押しあげられたと言ふことができる。

もっとも激しい反対意見はユニテリアン派の法王格と見られる頑固なノートンから提出された。ノートンはボストン・デイリー・アドヴァタイザー誌 *The Boston Daily Advertiser* に空前絶後とも言える公然の非難を発表して、『神学部講演』を不信心の典型だときめつけた。しかし、エマソンの言うノートンの「女性的な激しき」(feminine vehemence)を生命力にあふれる信仰心に対してエマソンが払った尊敬と弁護に比較すると、ノートンが非難した不信心とは、キリスト教に対する不信心というよりも、ノートン説に対するエマソンの不信心ではなかったかと言いたいくらいである。また、エマソンは完全な異教徒であるという多くの一般の人々の非難に対しては、『神学部講演』のなかの引用句を調べてみると、彼は徹頭徹尾キリスト教の信仰のために弁護していることが明らかである。まさに、バートル (Cyrus Bartol) が述べているように、「エマソンのなかに住む古いピューリタンが、ここで、生き返ったのである。」^⑨

人格高潔な紳士であるアダムズ (John Quincy Adams) にとっては、エマソンは檻のなかの狼であつて、アダムズは、「エマソンという名の若造はユニテリアン派の説教者と学校教師という二つの職業に失敗してから……新しい啓示と予言が近づいてきたということを宣言している」と非難して、エマソンの思想を当時流行の骨相学とか、動物磁気とか、奴隷制廃止運動のようなアダムズの所謂「悪事」と同一視して攻撃したのであつた。

この論争は、しばらくの間、新聞紙上を賑わせ、冒瀆の徒輩ニーランド (Abner Kneeland) の名とエマソンの名とが結びつけられたりしていた。もっとも保守的な長老教会派 (Presbyterian) の B・R・P・R・誌 *The Biblical Repertory and Princeton Review* はエマソンの講演を無意味で不敬なものだと非難し、この講演はクラン (Victor Cousin) 主義と同じような主義にもとづいてゐるけれども、明らかにカーライル (Thomas Carlyle) の模倣にすぎなくて、そこには聖書思想は何もなく、この作者は無神論者だときめつけた。このようなパンフレット合戦は興奮のおさまるまでつづいた。

これらの反対意見のなかで、もっとも重要なものは牧師ブラウソン (Orestes Augustus Brownson) の意見であるように私には思われる。ブラウソンの主宰する宗教雑誌『ボストン季刊評論』*The Boston Quarterly Review* 一八三八年十月号で、彼は『エマソン氏の講演』“Mr. Emerson's Address”と題して、『神学部講演』を痛烈に批判した。ブラウソンは教派を転々とした人ではあるが、極めて率直で、無遠慮な人であり、その論を進めるにあたっては、当時の誰よりも論理的であつたと言える。そして、彼の教義は、つねに、人類福祉のためという大目的をもっていた。これらの点において、彼はエマソンとはまったく正反対であつたと言えよう。その意味においても、一面に於て、ブラウソンのエマソン批判はきびしかった。『神学部講演』に対してブラウソンは、「その調子はいささか傲慢であり、その精神はあまりにも否定的で、陰鬱であり、その哲学は不消化で、論証は要領を得ていない」と攻撃し、エマソンの道德観、本能優先主義、非論理性、教義の目的が利己的であること、人間観の狭小なことなどを追求して、エマソンを非難攻撃した。さらに、論旨の曖昧さと、古い用語に新しい意味をもたせたことに対して反感をもち、「エマソンの講演は首尾一貫した調和のある全体性をもっていない」ときめつけた。本稿に於てはブラウソンの批判についての詳細な検討はその目的ではないから省略す

るが、結論的に言うならば、ブラウンソンの意見には多くの誤解が見うけられ、文脈をはずれた引用があり、一語、一句にとらわれているところが多い。そして、彼は人間の心のなかの霊の神聖ということを理解しなかったのであるが、そのことが、エマソンの説を誤解した原因であると考えられる。しかし、私がブラウンソンの批判はもっとも重要なものであると述べたのは、その非難にもかかわらず、彼が、そして、彼だけが、エマソンの講演の意義を認めたと思われるからである。すなわち、ブラウンソンだけがこの講演の精神と、それが及ぼすと思われる影響とを見ぬいたと思われるからである。私がこう言うのは彼はエマソンの抽象論を抽象論として受けとめて、一般の人々には実際的ではないということを示し、さらに、未来のアメリカに対する彼の影響力、すなわち、未来のアメリカにおけるエマソン哲学の実践化を予言したからである。以上に於て、当時の大多数の人々がエマソンのユニテリアニズム批判を非難したことと、それらの人々のなかの代表的な人々のとったエマソンに対する反対の態度について述べたのであるが、実はエマソンのユニテリアニズム批判に対すもっとも強烈な批判は、エマソンを称賛していた同時代の人々の意見からうかがわれるということが見落されがちであることを私は指摘したい。上に述べてきた人々は直接にエマソンを非難攻撃した人々なので、その批判は必要以上に重要視するには当たらないと私は思う。これから述べる人々の意見こそ結果的には最も重要視すべき批判になっているのではなからうか。

まず、ユニテリアン派の第一人者であるフロースインガムはエマソンのもつ信仰心、向上心、崇高さのために彼を高く評価し、彼を最も重要なユニテリアニズム反対者と呼んではいるが、二人の間の意見の相違はエマソンの紳士的作法と上品な趣味とのために、むしろ、好ましいものになっていると考えたほどである。実際、エマソンはクラーク (James Freeman Clarke) のように、新しい礼拝様式を制定しようとしたりはしなかったし、ブ

ラウンソン達が企てたことであるが、新しい宗教をとり入れるというようなこともしなかった。エマソン自身、最後まで教会の正会員として踏み留まることを主張し、パーカーのように教会と抗争を続けるというようなことはなかった。「エマソンは自分の歌をうたいつづけ、意見が一致しない人々に対しても、何等の非難めいた言葉も投げかけるようなことはしなかった。そのためにユニテリアン達は彼等の教理も教会の地位も安全だと感じていた。」^⑧一八四四年にフロースインガムはハーヴァード大学神学部で講演をして、「信仰上の変革の危機とか、新しい主義の紹介というようなものも長い間見られなかったし、また、真理とか、慈善とかいう方面でも古い方法を捨て去ることを正当化するようなものは何もなかった」と語り、ユニテリアニズム礼賛の結びの言葉のなかでエマソンをユニテリアニズムの多くのすぐれた指導者達の一人としてあげ、ユニテリアニズムを代表する理想主義者とさえ呼んでいる。こうなるとエマソンのユニテリアニズム批判は一体どのような成果を収めたと言えるのであろうか。結果的に見ると、フロースインガムの称賛はもつとも痛烈な批判になっているのではなからうか。

もう一つの例をあげておこう。同じくエマソン称賛者の一人であるバートルはエマソンのもっている多くの偉大な性質のなかで、とくに、エマソンの知性を当代でもっとも自由で公平なものだと称賛した。しかし、つづいてバートルは、「エマソンの作品は、それらがもつ重量感のためというよりは、それらがもつ崇高さのために注目されるべきである」と述べている。この意見を『神学部講演』だけに絞って考えてみると、これは適切なものと言えるかも知れない。しかし、同時に、エマソン自身が説教壇をすてて講演台を選んだときに彼の講演が一体どれほどの重量感をもつに至ったかがあらためて問われなければならないであろう。この点にバートルの批判がひそんでいるように考えられる。以上のようなわけで、意識的にせよ、無意識的にせよ、ほとんどすべての同時代人々はユニテリアニズムに対してエマソンがとった態度を批判したと言ってよいであろう。

(註)

- ① Rusk: *op. cit.*, p. 267.
- ② *Ibid.*, p. 268.
- ③ Cf., *Ibid.*
- ④ Cf., Bartol, Cyrus A.: "Emerson's Religion", in F. B. Snaborn, ed.: *The Genius and Character of Emerson*, University Press, 1884.
- ⑤ Mathiessen: *op. cit.*, p. 61.
- ⑥ ヴィクトール・クーザン(1792—1867)はソルボンヌ大学教授や文部大臣などをしたことのあるフランスの哲学者、文学史家であって、折衷主義哲学の代表者として知られていた。彼の哲学はスコットランド学派の哲学、プラトン、デカルト、シェリング、ヘーゲルなどの思想を折衷綜合して心理学的基礎の上に立てられたもので、当時の過激主義と伝統主義に反対したものである。パスカルの「パンセ」原稿の再発見、プラトンの翻訳、アペラール、デカルトの全集編纂をはじめ、十七世紀貴婦人達の研究などの文学史的研究もあつた。主著は『*Fragments philosophiques*, 1826; *Du Vrai, du Beau et du Bien*, 1837; *Cours de l'histoire de la philosophie moderne*, 1841; *Philos. sensualiste*, 1863; *Philos. écossaise*, 1863; *Philos. de Kant*, 1863; *Introduction à l'histoire de la philosophie*, 1865; *Histoire générale de la philosophie jusqu'à la fin de XVIIIe siècle*, 1867.
- ⑦ Brownson, Orestes A.: "Mr. Emerson's Address", in *The Boston Quarterly Review*, October, 1838, p. 501.
- ⑧ *Ibid.*
- ⑨ *Ibid.*, p. 514. エマソンは一般に考えられてきたよりも実際のな考え方をもち、プラグマティズムの先駆者であると思われる。このことに関しては稿を改めた。
- ⑩ Frothingham: *op. cit.*, p. 70

⑩ Cf., *Ibid.*

⑪ Bartoli: *op. cit.*, p. 133.

四

エマソン自身はこのような同時代の人々の非難攻撃に対して、どのように反応したであろうか。表面的には、『神学部講演』事件に対して、「エマソンは一言も撤回せず、一言も弁解せず、外面的にはびくともせず、そのままの態度を少しも変えなかった」^⑩のであった。ところが、超然として傍観者の態度をもって、学者の自由を完全に保持したエマソンであるが、ウィッチャーが指摘しているように、日記のなかでは内面的な動揺を示しているのではないかと疑われる。しかしながら、よく調べてみると、これは内面的な動揺ではなくて、エマソン自身の懐疑的態度が日記に表明されたのであると解釈すべきではあるまいか。エマソン自身が語るように、彼は計画をねり直し、果しなく低回し、空しく時を過すことが多かったようである。^⑪

エマソンの場合には公開講演は十分に検討しつくされたものであって、内面的な私的意見とは異なっていたから、『神学部講演』に対する多くの非難攻撃に彼が超然とした態度をとっていたのは、仮面をかぶったわけではなかったと言えるであろう。エマソンが受けた傷手があるとすれば、それは非難攻撃から受けたものではなくて、彼が自分自身で傷つけた傷手にほかならなかったと言えよう。^⑫ エマソンはノートンから痛罵された四日後の日記にこう書いた。「もし、真の学者になろうと望むならば、完全な自由をもたなければならぬと私は信じている。若い人々も、年老いた人々も不評判を気にしている。そして、世のなかで出会う嫌な表情を気にしている。しかし、私はそれらを恐れはしない。……私を非難する反対意見を分析すると、それらはひろまるだけの値

うちの無いような憶病や、不確実や、意見とも言えないようなものからなりたっている。……世間は私を買収できない。政治でも、社会でも、学校でも、都会でも私を買収することはできない。……もしも彼等が私の講演を聞いてくれないならば、私を求めている書物のために、それだけ暇な時間がさけるのだ。」^④その時にエマソンはまだ三十五歳であった。つづいて、「おちついて、おちついて、この善意と悪意の霧がおりると、前を見て、まっすぐに歩くことがむずかしくなる」と日記に書き、その翌年には、「私は勝手気儘に生きてゆこう。かたぐるしくて退屈な社会的習慣と様式とは御免だ。空は青く、野や森は緑色で、泉は新鮮だ。川は嬉々として流れているし、太陽と星の輝きは暖かく我々を迎えてくれる。私は自分の人生という遊戯を最後までつづけてゆこう。」^⑤という気持になった。このようなわけで、脅迫の記事や、不愉快な蔭口はどれほどの効果をもあげることができなかった。エマソンは誠実で物静かな態度を守って、決して自分の論文を他人に押しつけようとはしなかった。それであるから『神学部講演』に対する同時代の人々の非難攻撃にも彼は平静な態度を保つことができたのである。このことに関連して私は三つの重要なことを指摘したいと思う。

この三つの重要な指摘とは、多少大胆すぎるかも知れないのだが、第一に「孤独」が自分の才能にとっては必須のものだという信念にエマソンは常に勇気づけられていたということ、第二にエマソンはもっとも楽天的であるように見える彼の壮年時代においてさえも、人間を見るとときに、単純で無邪気な眼で見ただけではなかったということ、第三にエマソンは神を冒瀆しないで人間が神聖であることを宣言することができたということである。これらのことを指摘するために、ここで、とくに二つの日記の記事を、やや詳細に引用しなければならぬように思う。

彼の日記からの引用の第一のものは一八三八年十月十二日のものである。この日記の記事を見ると、エマソン

は『神学部講演』を発表するよりも前にこの講演の結果を見抜いていたことが分る。すなわち、「学者が世間に対して率直な態度で接するのは決して不似合いなことではない。学者が自分の話をする前に、その話がどんな結果をもたらすかを十分に見抜いていたことや、静かな書齋のかすかな灯火のもとで乱暴な非難の叫び声をあらかじめ聞いていたということを世間に公表するのは無益なことではないであろう。学者は人間の本性を知っている。人間は無為と慣習のために正気を失うものなのということも知っている。そして、人間はその夢と日常生活を乱されると、蝙蝠や、梟や、その他の夜間動物のように、吼えたり、泣き叫んだりして、松明を持つ先覚者に飛びかかるものだということもよく知っている。しかし、学者はこうした厄介な鳥や獣の仮装の下に、神々しい人間の容貌がかくされていることも明らかに見てとっているのである。そして、学者は勇気をだして彼等の親しい友人になり、彼等に取り憑いている不潔な妖精どもを祓い浄めて追い出してやるために、乱暴にも、彼等を真昼間のなかへ、健全な神の空気と水のあるところへ、ひきずって行こうという気持になるのである。憎しみと怒りの罵り声と叫び声、すなわち、人々が学者である私に与える形容詞は、とうの昔に書物のなかで読んでいたもので、私の耳には馬鹿々々しく古臭く聞える。同じような事態はかつて幾度も、（すなわち、独創的観察者が出現する毎に）起ったので、もし、世間の人々が、少しでも、文学史を知っているならば、私の場合とまったく同じ例証に思い当って驚くことであろう。諸君が私の言ったことに仰天して、喚き立てるに違いないということを私は知っているが、しかしまた、諸君と私とは簡単には妥協ができないということも知っている。なぜならば、これから以後も、諸君が我慢のならないほど驚くようなことを私はいくらでも言わなければならないからである。」^⑦

このようなエマソンの態度こそ、『神学部講演』事件についてのエマソンの詩的寓話のなかのユーリアル(Urial)

の態度であり、エマソンの言葉はユーリアルの物静かで、動揺しない、権威のある言葉と同じような響きをもっている。このような崇高な孤独の境地は、エマソンのような人でなければ到達し得ない境地であろう。エマソン自身が敬服していたW・E・チャンニングは『神学部講演』に対する見解をつぎのようにエマソン宛に書き送っている。すなわち、「敬愛する友よ。君の書いたものを読んで、そのすべてについて感じていることだが、この講演についても、ひとつの根本的欠陥があることが、はっきりと感じられる。それは、樹皮の傷のように、君の信仰が実るのを枯らし、萎らせるものだ。君は人類を否定している。君は、ほんとに、アダムのようになって、否、なろうと企てている。しかし、それはできないことなのだ。」^⑥

この、エマソンをアダムにたとえた観察眼は甚だするどいものだと言わなければなるまい。そして、このするどい観察眼とそれにもなう危険とは、たとえばエマソンのアダムというイメージをアメリカの神話として描いているルイス(R. W. B. Lewis)の『アメリカのアダム』*The American Adam*の底流にも見うけられよう。ルイスはエマソンの日記から引用した文章をその巻頭にのせている。——“Here's for the plain old Adam, the simple, genuine self against the whole world.”——ルイスの吟味は十九世紀のみに限られていて、ホーソン(Nathaniel Hawthorne)／メルヴィル(Herman Melville)／ホイットマン(Walt Whitman)／シェームズ(Henry James)の作品にみられる悪徳世界のなかにあって罪の意識をもたない登場人物を辿ってみせる。アダムの主人公はアメリカの小説においては、長い伝統をもつ古典劇にみられる国王とか王子とかに相当するものだ。ルイスは主張する。罪の意識がないということは必然的に危険をもたらすことを意味し、そこには、つねに、社会から隔離した孤立感というものがみられるものである。

ところで、エマソンをアダムの神話の創始者であると見なすルイスの主張とか、アメリカの小説におけるアダ

ム的神話を説くルイスの意見を認めようと、認めまいと、エマソンにとってはアダムであることがよるこばしいことであったという事実を私は指摘したい。すなわち、『神学部講演』のなかで、「まず第一に、諸君に警告したいことは独立独歩ということについてである。また、たとえ、人々が神聖なものと考えるものであっても、これを拒否して、仲介者なしに、直接に神を愛そうとすることは賞められるべきことである。諸君に競争心を起させようとしてウェズリー (Wesley) やオウバーリン (Oberlin) のような人々の名や、聖徒達や予言者達の名をあげる友人が多いであろう。そのような善人達のいることを神に感謝すべきではあるが、『我も人なり』と言わなくてはならない。模倣は、あくまでも、その手本よりもすぐれることは出来ない。模倣する者は、結局、どうにもならない凡庸者になりさがってしまうものだ。創始者がことを始めたのは、それが、彼にとっては自然なことだったからである。そして、そのことが彼のひとつの魅力になっている。模倣する者にとっては、何か別に、彼にとって自然なものがあるはずだ。そして、模倣する者は自分自身の美を失って、しかも、他人の美には及ばないのである。」と警告を發したときに、エマソンは聴衆に向ってというよりも、たしかに、自分自身に向って戒めていたのである。一週間に一度以上は、どんなに神聖な人とでも話したくないというエマソンにとっては、社会は、いつでも、一顧の価値をもたないものであったと思われる。「人はなるべく一人で歩んでゆくように心がければ、書物に書かれているあらゆる知恵に頼るよりも、いっそう高尚な勇氣をもって考えたり話したりすることができるようになるものである」という彼の言葉からもこのことは明らかであろう。それであるから彼自身「孤独」が自分の才能にとって必須のものだという信念をかたくいだいていて、それによって勇氣づけられていたのであると考えられる。

第二にエマソンはアダムのように孤独で生活しなければならぬわけであるが、彼には罪の意識が全然ないと

いうわけではなかったように思われる。たとえば、「私は自分のなかにある黒い汚点をよく知っている。自分自身の目的を達成することなく、自分自身を満足させずに神聖な婦依から遠ざかって、どうして私が他人に満足を与えることや、彼等の愛を求めることなどを期待することができるであろうか。気むずかしい表情や、刺すような言葉は私のあらゆる欠点に対する安価な罪亡ぼしにすぎない」とエマソンは一八三八年十一月八日の日記のなかに書きこんでいる。そしてまた、この日記の記事はエマソンの詩『ユーリアル』に対する一般に行なわれている解釈とは異なった解釈が可能であることを暗示しているように思われる。一般にはこの詩の比喩は善と悪、幸と不幸の同一性を物語っていると解釈され、彼の『隨筆集上巻』(Essays I)のなかの『報償論』(Compensation)の説くところに近いと考えられているようである。たしかにこの詩のなかのユーリアルの歌を読めばこのことは首肯できようが、この日記の記事を念頭におくときに、読者はこの詩『ユーリアル』をより一層意義深く読むことができるのではないかと思われる。この詩のなかでユーリアルはこう歌っている。

"Line in nature is not found ;

Unit and universe are round ;

In vain produced, all rays return ;

Evil will bless, and ice will burn."

(Pub. 1847)

「自然のなかには境界線がない」

エマソンのユニテリアニズム批判について

個体と宇宙とはただひとつで

無意味につくりだされても、光はすべて帰って来る

災禍も祝福し、水も燃え上る

『神学部講演』の数年後に書かれたこの詩が神学部講演事件に対する寓話的言及だということはこの詩がミルトンの『失樂園』(Paradise Lost)のなかの大天使ユーリアルとエマソン自身とを同一視して書かれていると考えるときに容易に推論できよう。エマソンが自分自身をユーリアルに譬えたのは、マン(Horace Mann)がエマソンの肖像画を描いたときに、「太陽のなかに坐する男」として彼を描いたのをエマソンが、「太陽のなかに坐する大天使ユーリアル」と結びつけたものと考えられる。ウィッチャーはこの詩『ユーリアル』を「当時の人々の言うところの『エマソンの不信』がひき起した驚愕的衝撃を彼が後悔無用の喜悅だと感じているもの」と解釈し、マシーセンは詩『ユーリアル』のなかに決定的で物静かな調子をもって物語ること、すなわち、人間の絶えず増大してゆく偉大さを確信をもって肯定することが「詩人の役目」だというエマソンの考えを読みとっている。これらの説明はいずれも納得できるものではあるが、エマソンをただ物静かなユーリアルだと見なししてしまうことは不十分な解釈だと言うことができるのではあるまいか。『失樂園』ではユーリアルは最高天使のなかでも、もっともするどい洞察力をもつ、太陽を支配する霊である。しかし、いかにすぐれた洞察力を与えられていても、小天使に変身した魔王を識別できないで楽園に導いて、人類にふりかかる災禍をもたらしたのはユーリアルであった。このユーリアルの致命的欠陥については、善は悪が見えないところでは、いかなる悪をも予想し得ないからだというようにミルトンは弁明している。このユーリアルのような悪を知らない態度、すなわち、善悪の同一

性を認める態度がエマソンの態度だと多くの人は考えているようである。しかし、彼の詩『ユーリアル』について、ウィッチャーやマシーセンのくだしたような解釈にとどまっているだけならば、雲の上で真実を語る天上の人としてのエマソンの一面だけを物語っているにすぎないことになってしまふであろう。十一月八日の日記の記事を想起しながら、自分自身のなかにある黒い汚点を意識して自己を責めているエマソンはユーリアルの知らない「自己を知る」という悲しいことをよく意識していたのだということをおわせ考えるときに詩『ユーリアル』にはより深い意義が認められるのではあるまいか。この点については、「全自我」に到達するということが最後までエマソンにつきまとった一つの達成できない熱望であったというスナイダー (Denton J. Snider) の意見を私は尊重したい^⑤。このようなわけで、エマソンは決して人間を見るときに単純で無邪気な眼で見ていたばかりではなかったと言ってよいであろう。

第三にエマソンが神を冒瀆することなしに人間の神聖を宣言することができたのは彼が理想と現実とは別問題であると考えていたからであると私には思われる。エマソンの第一の主張は孤独を愛することであり、第二の主張は自分のなかの黒い汚点を意識しているがゆえにあらゆる形の放縦と絶縁することであったが、彼自身は決して所謂「世捨人」にはならなかった。たとえば、金銭問題についてはとくに断固として実際的であったことは彼の日記のなかに散見される。現実的なアメリカではエマソンは金銭面の重要性を強調する必要を感じなかったのだとスナイダーは指摘しているが、正にその通りであろう。また、エマソンの思想は論理的、組織的ではないという非難が一般にあるが、これも彼が現実的、実際的であったからであると解釈して差支えないであろう。この点に関連して彼の思想のなかにプラグマティズムの萌芽を認めているタウンゼンド (H. G. Townsend) の意見も重要視したい^⑥。さらにまた、「自己を知る」ということには限界があつて、到底、完全に自己を知ることとはできない

ことごときとって、「最後の部屋、すなわち、最後の密室は決して開かれぬ」ということを知らなければならぬ。つねに知ることのできない、分析することのできない残余というものがあるものだ」とエマソンは書いている。自分の思想でも完全に理解し尽すことのむずかしいことを知っていたエマソンは自分の思想を他人に理解してもらったことが一層むずかしいことだということも知っていた。これらのことからエマソンを非実地的な理想主義者であったという説には賛成できない。ソーローと同じように人間をありうるように完成することはあまりにも困難な仕事だからあるがままにしておくほうが手間がかからないとエマソンも考えたかも知れないとさえ私は想像する。エマソンは実地的であったからこそ容易に理想と現実とは別問題だと考えることができたのだと私は思うのである。『神学部講演』のなかで「自己を知る」ということはいかに傲慢な自信でも崩れさせるからそのために人間は神聖でありうるのだと言ったエマソンは実は理想と現実とを分離したから神を冒瀆することなしに人間の神聖の可能性を宣言することができたのだと考えられる。以上のようなわけでエマソンは『神学部講演』に対して加えられた多くの非難攻撃にもほとんど影響されずに超然とした態度をとることができたのだと言ってよいであらう。

(註)

- ① Whicher : *op. cit.*, p. 98.
- ② Cf., Arnold, Matthew : "Emerson" in *Discourses in America*, ed. 1885. Macmillan and Co.
- ③ Cf., Whicher : *op. cit.*
- ④ Emerson : *Journal*, August, 1838.
- ⑤ *Ibid.*, October, 1838.
- ⑥ *Ibid.*, June, 1839.

- ⑦ *Ibid.*, October, 1838.
- ⑧ Whicher : *op. cit.*, p. 505. 聖職やヒマンンにさうなれたいとたかじつじつは難を致めたる。
- ⑨ Lewis, R. W. B. : *The American Adam*, Phoenix Books, 1955, p. 128.
- ⑩ Van Doren, Mark : *op. cit.*, pp. 64-65.
- ⑪ Emerson : *Journal*, October, 1833.
- ⑫ *Ibid.*, November, 1838.
- ⑬ Whicher : *op. cit.*, p. 98.
- ⑭ Matthiessen : *op. cit.*, p. 77.
- ⑮ Milton, John : *Paradise Lost*, Book III, 653-691.
- ⑯ Cf., Snider, Denton J. : *A Biography of Ralph Waldo Emerson*, William Miner Co., 1921.
- ⑰ *Ibid.*, p. 186.
- ⑱ Cf., Townsend, H. G. : *Philosophical Ideas in the United States*, 1936.
- ⑲ Matthiessen : *op. cit.*, pp. 9-10.
- ⑳ Canby, Henry Seidel : *The Works of Thoreau*, Cambridge Edition, Houghton Mifflin Company, Boston, 1937, "Walden, Sound", p. 325.

五

結論として、エマソンのユニテリアニズム批判はどの程度のものであったか。一八六七年には神学部当局は未だ釈然とはしなかったが、ハーヴァード大学はエマソンに博士号を贈り、大学の監督（Harvard Overseer）に選出した。そして、この年には『アメリカの学者』講演以来、約三十年の期間において、ふたたび、エマソンは

ファイ・ビータ・カップの会合で講演することになった。この講演の内容は、いわば、『アメリカの学者』の歴史的補足ともいふべきもので、一八三七年に彼が発表した予言が正しかったことを述べたものである。このようにして、エマソンを非難したまさにその要塞のなかにはいる名譽を彼は獲得したわけである。とくに晩年のエマソンの宗教思想については当時いろいろと問題にされ、たとえば、J・クック (Joseph Cook) はエマソンが晩年には元通りのキリスト教徒に復帰したと言って非難し、G・W・クックがそれに対してエマソン弁護論を書いたりしている。また、エマソンの息子エドワード (Edward Emerson) はファーガソン (Alfred Ferguson) の質問に対して、エマソンはいずれの教会にも所属していないと答えている。さらに、エマソン自身は論争を避け、クリスチャン・サイエンスその他の熱心な勧誘にも応じなかったというようなことも伝えられている。そして、最後に、「エマソンの葬列は自宅からユニテリアン教会へと向った」^①のであって、エマソンとユニテリアニズムとの関係を切り離して考えることは不可能である。エマソンは講演会場では講演者なんの束縛もなく自由に雄弁をふるえるという理由で教会を捨てて講演会場を自分の信念を発表する場として歓迎したのであったが、ここで既に引用した『神学部講演』のなかの説教について彼が語った言葉を想起する必要がある。すなわち、「説教とは人々に向ってなされる話で、本質上、すべての機関、すべての形式のなかでもっとも人の意のままになしうるものである」と彼が考えたことである。エマソンは終始教会の説教壇に愛着をもち、その講演内容は講演会場での講演の場合も、教会での説教の場合と完全に切り離して考えられるほど異なるものではなかった。このような態度はまた彼の言う理想の大学像にもうかがわれる。すなわち、「……『理想の大学』——自分が大学を経営するならば……職員達に神を尊敬し人々を愛するためにきたれと命令する」^②と彼は考えていた。これらの文章を引用したのはエマソンの教会に対する愛憎両感情の並存がうかがわれることを私は指摘したいからである。また、

たとえば牧師の職務に対する愛憎という反対感情が同時に彼に作用していることが、詩『問題』 *The Problem* のなかでは明らかに読みとれる。この詩を引用することは多少長くなるのでさけるべきかも知れないが、詩全体からうける印象の重要性を考慮して全文を引用することを許して頂きたい。

THE PROBLEM

I like a church ; I like a cowl ;
I love a prophet of the soul ;
And on my heart monastic aisles
Fall like sweet strains, or pensive smiles ;
Yet not for all his faith can see
Would I that cowl'd churchman be.

Why should the vest on him allure,
Which I could not on me endure ?
Not from a vain or shallow thought

Never from lips of cunning fell

The thrilling Delphic oracle ;

Out from the heart of nature rolled

The burdens of the Bible old ;

The litanies of nations came,

Like the volcano's tongue of flame,

Up from the burning core below, ...

The canticles of love and woe :

The hand that rounded Peter's dome

And groined the aisles of Christian Rome

Wrought in a sad sincerity ;

Himself from God he could not free ;

He builded better than he knew ; ...

The conscious stone to beauty grew.

Know'st thou what wove yon woodbird's nest

Of leaves and feathers from her breast ?

Or how the fish outbuilt her shell,
Painting with morn each annual cell ?
Or how the sacred pine-tree adds
To her old leaves new myriads ?
Such and so grew these holy piles,
Whilst love and terror laid the tiles.
Earth proudly wears the Parthenon,
As the best gem upon her zone,
And Morning opes with haste her lids
To gaze upon the Pyramids ;
O'er England's abbeys bends the sky,
As on its friends, with kindred eye ;
For out of Thought's interior sphere
These wonders rose to upper air ;
And Nature gladly gave them place,
Adopted them into her race,
And granted them an equal date
With Andes and with Ararat.

These temples grew as grows the grass;
Art might obey, but not surpass.
The passive Master lent his hand
To the vast soul that o'er him planned;
And the same power that reared the shrine
Bestrode the tribes that knelt within.
Ever the fiery Pentecost
Girds with one flame the countless host,
Trances the heart through chanting choirs,
And through the priest the mind inspires.

The word unto the prophet spoken
Was writ on tables yet unbroken;
The word by seers or sibyls told,
In groves of oak, or fanes of gold,
Still floats upon the morning wind,
Still whispers to the willing mind.

One accent of the Holy Ghost
The heedless world hath never lost.
I know what say the fathers wise . . .
The Book itself before me lies,
Old *Chrysostom*, best Augustine,
And he who blent both in his line,
The younger *Golden Lips* or mines,
Taylor, the Shakespeare of divines.
His words are music in my ear,
I see his cowléd portrait dear ;
And yet, for all his faith could see,
I would not the good bishop be.

(Pub. 1847.)

問 題

私は教会が、牧師頭巾が、好きなのだ
心樂しむ樂の音か、もの思ふ微笑のちびた、うづるのだ
魂の予言者を私は愛してゐる

ハマソンのユニテリアニズム批判について

エマソンのユニテリアニズム批判について

私の心には教会の側廊が

しかし、牧師の信心が見うるあらゆるものにかえても
頭巾をかぶる牧師にはなりたくない。

なぜ、牧師服が私の心を誘うのか

それを着るのは、たえられないことなのに。

若い彫刻家フィディアスがおそろしいジュピターの神像を彫んだのは

うつろな思想や、浅はかな考えからではなかった

ぞっとさせるデルファイの神託は

いつわりの唇から出たものではなかった

あの古い「聖書」の繰り返し文句も

自然の心から出たものだ。

諸国の人々の連禱の歌は

火山の炎の舌のように

地の底の燃える核から

愛と悲しみの詠唱となって噴き出したものだ。

「ペテロの寺院」の天蓋をつくりあげ

「ローマの寺院」の側廊の天井にアーチを仕上げた手は

いたましいほど誠実に働いた。

その人は自分を「神」から解放してなかった

彼は自分でも分らないほど立派に建物をつくりあげた——
心ある石が美に変わったのだ。

汝は知っているのか

いかなるものが、彼方の森の鳥の巢を

木の葉や胸の羽毛で織りなしたのかを

また、蛤が殻の年輪を曙色で塗りながら

どのようにして、外側に貝殻をつくったかを

また、神聖な松の樹が

いかにして、古い葉に新しい幾万の葉を加えるのかを。

そのようにして、これらの聖殿は完成した

愛と恐れがタイルを積みあげてゆくうちに。

大地は最高の寶石を帯につけるように

誇らしげに、「パルテノン神殿」をおびている。

そして、朝の女神は急いで目ふたを開き

「ピラミッド」を見つめる。

大空はかがみこんで、英国の寺院に

親しい友人を見るように、気心のあった目をひける。

「思想」の内界から

これらの驚異が、高い大空に聳え立ったのだから。

エマソンのユニテリアニズム批判について

エマソンのユニテリアニズム批判について

そして、「自然」は喜んで、それらに場所を与え

一族のなかに迎え入れ

「アンデス」や「アララット」の峰と

同じ齡を許してくれた。

これらの殿堂は草と同じように成長した

それに服従しても、それを凌駕するほどの技巧はない。

命せられるままに「名匠」はその手を

計画をつくった広大な靈にかしたのだ。

神殿を建てたのと同じ力が

その内部で跪く部族達の上にも、虹のようにかかっていた。

絶え間ない火のように燃える「五旬祭」が

無数の大衆を、ひとつの焰でとりかこみ

歌う合唱団によって、心を酔わせてくれる

そして、牧師によって、心に靈感を吹きこんでくれる。

予言者に語られた言葉は

金剛不壊の石板に記された。

男女の先見者達によって記された言葉は

樞の森や、黄金の神殿に

今なお、朝風にひるがえり

今なお、帰依する信心に曝きかける。

「聖靈」のひびきを

心ない俗世間さえ、うしなうことがない。

昔の賢者達の語る言葉を私は知っている――

あの「書物」は私の前にある

「老クリサスタム」の言葉も、善良きわまりない「オーガスティン」の言葉も

その詩のなかにこの二人をませあわせた

若い「黄金の唇」や金鉱をもつ雄弁家の

神学界のシェイクスピアとも言えるテイラーの言葉も。

彼の言葉こそ、私の耳には楽の音

私は牧師頭巾をかぶった彼のなつかしい肖像面を見る。

しかし、なお、彼の信心が見うるあらゆるものにかえても

私はこういう善良な僧正にさえなりたくないのだ。

このように愛憎という反対感情を同時に抱いているエマソンを単純な「信念の人」とだけ呼ぶことは当を得ていないように思われる。彼は一種の複雑な「懷疑家」でもあったと言うことが許されるのではなからうか。ここでエマソンと同時代の人々がエマソン主義を十分に是認していたと考えることはエマソン論を書くのに大いに都合がいいように思われるがそれは不可能であろう。なぜならば、既に述べたように最後の密室は決して開かれないうということを知っていたのでエマソン自身でさえもエマソン主義を心から完全に是認していたのだとは言いがたいからである。以上のようなわけで当時の人々が想像したほどエマソンはユニテリアニズムそのものに反対し

たものではなかったというのが本稿の結論である。

公的の立場におけるエマソンが一八六〇年代以前の十九世紀アメリカにおける自由主義神学界の第一級の闘士であったことには疑問の余地はないが、「講演会場での信念の人エマソン」と「書斎での孤独の懐疑家エマソン」との間における距離を見落すことはできないように思われる。その意味でエマソン自身一つの『疑問』であると言ってもよいであろう。ここで「講演会場での信念の人エマソン」という言葉と「書斎での孤独の懐疑家エマソン」という言葉を私は用いたが、これに関するより大きな問題を引き出す役目を本稿に托したということをおきたい。

(註)

① Rusk: *op. cit.*, p. 508.

② Emerson: *Journal*, May, 1846.